

熊野参詣道伊勢路における巡礼空間の装置性

Study of the Space Structure of Kumano Pilgrimage Route Iseji

伊藤 文彦* 伊藤 弘** 武 正憲**

Fumihiko ITO Hiromu ITO Masanori TAKE

Abstract: A pilgrimage route is the spatial route that a pilgrim travels, from the point of departure to the sacred destination. The Iseji pilgrimage route in Kumano can be described as a typical one. It has connected Ise and Kumano for over a thousand years, until the middle of the 19th century, and parts of this route are inscribed on the World Heritage list. This study aims to identify and describe the characteristics of the space structure of the Iseji pilgrimage route in Kumano, using literature analysis, geographical research and archaeological surveys as research methods. The results of these analysis show that there were temples and sights established along the pilgrimage route which supported pilgrims on their travel. Temples related to the sacred destinations, placed at appropriate distances, indicated the right way to the destination, and served as a verification for the travellers' position as pilgrims. Sights were arranged around the flat section of the route where the walk easily got boring for the pilgrims. The sights were not directly related to the sacred destinations, but they all had specific meanings with basis in the local environment, such as flourishing town, old famous travellers, and ghost stories about demons. In addition to that, they were related to a world separate from that of daily life, in other words, they constituted a landscape of meaning, which enabled the pilgrims to assess the progress of their pilgrimage journey.

Keywords: pilgrimage route, guide books, space structure, landscape of meaning

キーワード: 巡礼路, 道中案内, 空間構造, 意味の風景

1. はじめに

巡礼は世界に普遍的にみられる人間の文化的行為であり、巡礼路は出発地と巡礼目的地を結ぶ巡礼が行われる空間である。熊野参詣道伊勢路は平安時代から江戸時代にかけて、巡礼が実践された道である。特に近世には、伊勢参宮の後、西国三十三所巡礼のため、熊野三山の一座で西国一番礼所的那智山青岸渡寺へ向かう巡礼者が年間 2 万人前後通過した。こうした歴史性が評価され、その一部は 2004 年に世界遺産に登録された¹⁾。しかし、世界遺産登録が一部に限定された結果、巡礼路としての空間が持つ特徴や巡礼に関する諸要素には、等閑に付される部分も発生している。巡礼者は道を辿って空間を移動しており、道だけでなくその空間展開にも何らかの意味づけがなされていると考えられる。本研究は、近世の熊野参詣道伊勢路が、全域にわたってどのような巡礼空間として機能していたかを解明することを目的とし、それにより、巡礼空間の諸要素が特定され、文化遺産としての適切な保護が図られるものとする。

熊野参詣道伊勢路に関して、巡礼空間の特徴を検討した先行研究には、現地踏査等により経路を特定した調査²⁾や、道中案内や道中日記の記述により峠道等の状況を検討した研究³⁾、西国三十三所巡礼の起点部分に当たると指摘した研究⁴⁾があるが伊勢から熊野まで全体の巡礼空間を研究したものはない。巡礼空間については、巡礼の実践記録から復元した研究⁵⁾や、地域住民が発掘した聖なる空間とする研究⁶⁾、巡礼者の認識による構築物⁷⁾もしくは社会的構築物⁸⁾として理解する研究がある。本研究では巡礼空間を巡礼者に働きかけを行う空間としてとらえる。空間が人に働きかけを行う作用に注目した研究には、社寺参道において検討した研究⁹⁾や、近世の遊樂空間において検討した下村らの研究¹⁰⁾がある。下村らは、近世の遊樂空間の分析において、「空間の異界性、非日常性を支え、来訪者の心の状態や気持ちの切り替えや高まりに働きかける空間的仕掛」のことを「装置性」として定義し、遊里や芝居町の空間の特質を明らかにした。本研究ではこの定義を参考に、

道中案内が示す情報と空間展開の中に見られる「空間的仕掛」の組み合わせが巡礼者の意識を変化させると考え、この組み合わせを巡礼路の「装置性」として把握し、伊勢から熊野までの区間に渡って施された装置性を解明する。

2. 研究方法

巡礼は聖地を巡るという側面と旅行の側面があると考えられる。したがって、近世における熊野参詣道伊勢路の装置性を解明するため、まず道中案内に記載される礼拝施設・見所（以下施設等と記す）を抽出する。道中案内は巡礼者が旅をするにあたり携帯するガイドブックであり、そのため巡礼者に注意喚起する事項を記述し、その印象や活動を規定すると考えられる。このことから、道中案内に記載のある施設等は巡礼者にとって何らかの意味を有すると考えられる。抽出作業にあたっては、これまでに入手できた元録

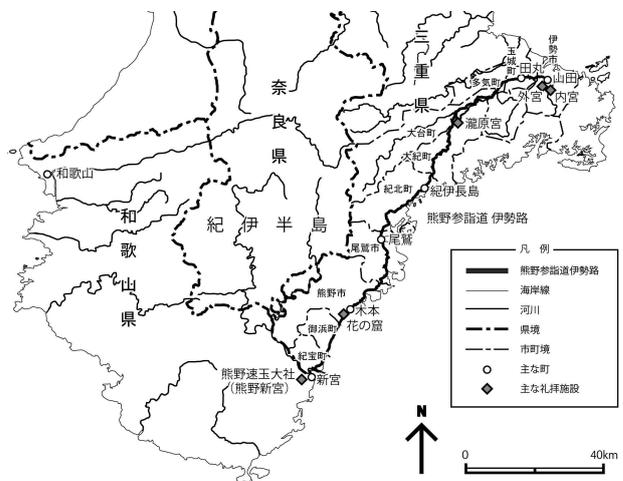


図 - 1 熊野参詣道伊勢路位置図

*筑波大学大学院人間総合科学研究科/三重県立斎宮歴史博物館 **筑波大学芸術系

年間から天保年間までに刊行された道中案内を用いる¹¹⁾。これら道中案内はいずれも刊本であり、西国巡礼の道中案内として共通の性格を持っており、刊行段階での執筆者の巡礼旅に対する認識を反映しているものと考えられる。そこで、これら道中案内に記載されている施設等について、記述の有無や記述内容から、重要視されていたと判断される施設等を抽出する。次いで、抽出された施設等の特性について、自治体史等の記述を確認する文献調査と、現地踏査により施設等が行程において巡礼とどのような関係を有するかについて把握を行う。加えて、地形のよみとり作業から伊勢山田から熊野新宮までの地勢と当時の旅人の歩く速度を考慮して、当時の巡礼者と施設等の関係を検討し、これら施設等が巡礼者に対し、巡礼旅と関連付けて認識されていたかについて考察する。

3. 結果

(1) 礼拝施設の展開

1) 礼拝施設の抽出とその性格

まず、沿道に展開する礼拝施設について、道中案内から抽出を行った。その結果、近世を通じてかたよりなく紹介され、重要視され続けていたと思われる5箇所が抽出された(表-1)。

次に、各礼拝施設の性格について検討した(表-2)。

「瀧原大神宮」は、三重県度会郡大紀町に所在する伊勢神宮別宮の瀧原宮である。創祀は平安時代以前にさかのぼり¹²⁾、近世の道中案内では式年遷宮を示して伊勢神宮と同様であることを示す。一方、嘉永6(1853)年の『西国三十三所名所図会』(以下『名所図会』)¹³⁾では、鳥居前に神宮寺があり、三十三体観音の安置を記す。以上より、瀧原大神宮は近世には伊勢神宮と西国巡礼に関連する礼拝施設として巡礼者に認識されるものであったと考えられる。

「天狗岩窟」は三重県尾鷲市南浦に所在する寺院で、今日では岩屋堂と呼称される。道中案内では石仏があることが示される。現地踏査すると、天然の岩屋を仏堂として利用したもので、室内には室町時代造立の聖観音菩薩坐像1軀のほか、延宝5(1677)年の三十三体石仏が安置される¹⁴⁾。以上から、天狗岩窟は近世には西

国巡礼に関連する施設として巡礼者に認識されたと考えられる。「日輪寺」は三重県尾鷲市の八鬼山山頂付近に所在する寺院で、今日では八鬼山荒神堂と呼称される。道中案内は、本尊は三宝荒神、脇侍は阿彌陀、薬師、観音と記し、坂の途中に町石の存在を示すものがある。今日でも小堂が存続し、本尊の天正四年銘石像三宝荒神立像のほか、三軀の石仏が安置される¹⁵⁾。阿彌陀如来、薬師如来、観音菩薩は熊野三山の本地仏である。また、八鬼山越えに遺存する町石には銘文に伊勢山田の住人らによる寄進を刻むものがある¹⁶⁾。さらに、尾鷲には当寺は「西国巡礼前札所」という口碑が残る。以上より、日輪寺は、熊野、伊勢、西国巡礼に関連する礼拝施設として巡礼者に認識されたと考えられる。

「清水寺」は三重県熊野市の清滝の上流に所在した寺院である。道中案内では田村丸建立の観音堂で本尊は千手観音とされる。『名所図会』所引の「清水寺縁起」は、坂上田村麻呂(田村丸)との関係を強く示し、京都府京都市東山区所在で坂上田村麻呂を本願、本尊千手観音、西国三十三所第十六番札所、音羽の滝で著名な音羽山清水寺との強い関連性を想起させる。清水寺は近世には西国巡礼関連の礼拝施設として巡礼者に認識されたものと考えられる。

「花の岩や」は三重県熊野市に所在する現在の花の窟神社の神体である大岩壁である。道中案内では、非常に高い「岩壁」「岩山」があり、その前に鳥居、井垣、石灯籠があることが記され、2月に祭礼があるとす。一方、『名所図会』においては、日本書紀を引用し天照大神の父母神である伊弉册神の葬地であるとされる¹⁷⁾。また、道中案内で紹介される祭礼は現在の「お綱かけ神事」と考えられる。この特異な神事は熊野三山との関係性を想起させる。以上花の岩やは伊勢神宮や熊野三山に関連する礼拝施設として巡礼者に認識されるものであったと考えられる。

このように、近世を通じて紹介される5箇所の礼拝施設は、自然環境を背景に中世以前に創祀され、近世には、熊野三山・伊勢神宮・西国巡礼に関連付けられた施設として巡礼者に認識される施設であったことが明らかとなった。

2) 礼拝施設の立地と新たに追加された礼拝施設

次いで、これら礼拝施設の立地について検討した。まず、伊勢山田から熊野新宮までの経路をコンピュータソフト¹⁸⁾を用いて作成した縦断面図に、抽出した5箇所の礼拝施設の位置を記入し(図-2、礼拝施設上段)、礼拝施設の立地を把握した。また、近世の旅人が9里/日歩行するとして¹⁹⁾伊勢から何日目に礼拝施設に到達するかを算出した。その結果、抽出された5箇所の礼拝施設は、1日目を除いて伊勢から熊野までの間、毎日いずれか1箇所以上を通過することが明らかとなった。

19世紀になると、伊勢から1日目の行程の範囲に新たに礼拝施設が紹介される。「観音庵」は、道中案内に「西国札所はじめ」と記され、現地には三十三体観音石仏や「順礼道引観世音」の標柱が遺存する。旧境内の調査から文化年間に整備された礼拝施設であると考えられる²⁰⁾。また、「千福寺」は中世以前の成立が文献から知られ、今日でも寺院入口に「順礼手引」の標柱が残る²¹⁾。江戸時代中期の18世紀半ばには西国巡礼に関連付けられた礼拝施設へと転換したものと考えられる。これら2つの寺院は、17世紀には巡礼に関連付けられた礼拝施設のなかった1日目の行程を補完する礼拝施設であると考えられる(図-2、礼拝施設下段)。

3) 礼拝施設の意味と立地

以上より、近世の伊勢山田から熊野新宮までの熊野街道沿道に立地した礼拝施設の性格が明らかとなった。伊勢山田から熊野新宮までの熊野街道沿道には、創祀が中世以前に遡る礼拝施設(瀧原大神宮・天狗岩窟・日輪寺・清水寺・花の岩や)が存在しており、近世を通じて意図的に礼拝施設を整備(観音庵・千福寺)することも行われた。これら礼拝施設は、いずれも伊勢神宮、熊野三山、西国三十三所巡礼等、巡礼旅と関連付けられていた。さらに、これ

表-1 道中案内における礼拝施設記載状況

文献番号	1	2	3	4	5	6	7
刊行年	1690	1728	1775	1782	1806	1829	1840
施設名							
観音庵							○
千福寺						○	○
瀧原大神宮	○	○	○	○	○	○	○
浄光寺	○						
明神	○		○				
薬師尊	○						
岩山地藏堂						○	○
天狗岩窟	○		○			○	○
地藏	○		○				
日輪寺	○	○	○	○	○	○	○
観音堂	○						
正崇寺	○						
宮	○						
清水寺	○	○	○	○	○	○	○
花の岩や	○	○	○	○	○	○	○

○は記載のあることを示す。網掛けは17, 18, 19世紀にそれぞれ記載のある礼拝施設。

表-2 近世を通じて紹介される礼拝施設

施設名	由来	内容	関連
瀧原大神宮	瀑布	伊勢別宮・三十三体観音像	伊勢・西国
天狗岩窟	岩窟	三十三体観音石仏	西国
日輪寺	山頂	熊野本地仏・伊勢寄進・西国前札所	熊野・伊勢・西国
清水寺	瀑布	京都清水寺との関係を想起	西国
花の岩や	巨岩	伊弉册尊・特異な祭礼	伊勢・熊野

ら礼拝施設は、巡礼者の歩行1日あたり1箇所以上通過するように立地していた。このように、巡礼者は、巡礼の目的地等に関連付けられた礼拝施設に毎日参詣する状況にあったと考えられる。巡礼者は、旅の途中でこれら礼拝施設に遭遇することで、自分が歩く道が伊勢神宮から熊野三山、西国三十三所へと続く巡礼道であることを確認できたものと考えられる。このように、近世の伊勢山田から熊野新宮までの街道には、旅の行程1日毎に巡礼者を礼拝施設に参詣させる空間的仕掛けが存在し、それらは道中案内によって巡礼旅と関連付けられていたことが明らかになった。

(2) 礼拝施設以外の見所の展開

1) 見所の抽出

次に、道中案内から礼拝施設以外の重要視されていた見所と考えられる箇所について抽出を行った。道中案内には、巡礼旅において経由する集落や宿場の名称や、礼拝施設の名称のいずれにも属さない土地や事物等の名称が記されている。これらを「見所」として把握する。

見所については、記述内容が各道中案内で異なり、礼拝施設ほどの画一性が見られない。そこで、分析対象の7冊の道中案内のうち、過半数の4冊以上の道中案内で紹介されている見所が重要視されていたと考え、分析対象として抽出した(表-3)。また、『名所図会』での本文記述状況と挿絵描写状況も合わせて検討した。

2) 抽出した見所の性格

「田丸城・田丸城下」は現在の三重県会郡玉城町田丸の集落である。道中案内には城郭があること、町であること、巡礼者が購入できる物品が記述される。『名所図会』の挿絵には、巡礼者の物品購入や、馬子、扇を振り上げ進む旅人、魚を商う人物、口論する人物などが描かれ、町の賑わいと旅人の多さを示している。このように、田丸は賑わう町として巡礼者に認識されていたものと考えられる。

「蚊野の松原」は現在の三重県会郡玉城町蚊野に存在した松原である。道中案内の記述は名称を記すにとどまる。『名所図会』は松茸の産地であることを示し、挿絵には松原への立入を禁止する標柱や、巡礼者のほか地元住民と思われる人物が行き交う様子も描かれる。これらから、蚊野松原はこの地域の生活に密着した松原として巡礼者に認識されていたものと考えられる。

「長者屋敷」は現在の三重県会郡大紀町滝原の大紀町立大宮中学校付近であると考えられる。道中案内の記述は「かつて長者がいた所の野がある」という内容にとどまる。具体像を知るため、近世の道中日記をみると、「長者ヶ野とてむかし長者の住し屋敷跡なるよし間口一町ほど奥行五六丁程有山■■の谷間なり原中に塚

二ツ有り長者の墓なりとそ(■は判読不能文字)」とするものがある²²⁾。この記述からは、かつて長者の屋敷が存在しながら現在ではそれが見られなくなっている、かつての繁栄を彷彿とさせる場所として巡礼者に認識されていたものと考えられる。

「伊勢紀伊国界」は、現在の三重県会郡大紀町と北牟婁郡紀北町の町境に所在する荷坂峠付近である。道中案内にはここが伊勢国と紀伊国の国境で、ここから熊野であることが示され、境界を明示する。『名所図会』では挿絵を付し、「東南の滄海渺々として、紀の路の浦々遠近に連なり長嶋二江など眼前にありて風景言語に絶す。」と記述し眺めを評価する。ここは伊勢山田以降初めて海が見える地点であり、境界の認識を一層際立たせるものであったと考えられる。このように、この地点は巡礼者に「境界」を認識させるものであったと考えられる。

「西行松」は、現在の三重県熊野市波田須町に所在した松である。文献1は、「さがり松とて二本一所にはへ毎枝のさかりたる松あり」と記すのみであり、文献2も「峠にほうじの松有名木なり」とあって、西行の名は記さない。しかし文献3では、「峠に西行の松あり」と西行の記述が登場し、以降継続する。さらに今日では「自らの才能の無さを嘆いた西行がこの松の場所で引き返した」という伝承まで付与されている²³⁾。西行は12世紀に実際に熊野から伊勢へ旅しており、この地にあった名木の松に18世紀頃に西行の故事が付与されたと考えられる。このように「西行松」は巡礼者に「旅の物語」を想起させるものであったと考えられる。

「鬼が城」は現在の三重県熊野市木本町に所在する「熊野の鬼ヶ城」である。道中案内の記述は大岩、岩窟であることを記し、文献1は「おそろしき」という言葉を付す。一方、先述の「清水寺縁起」

表-3 道中案内における見所記載状況

文献番号	1	2	3	4	5	6	7
刊行年	1690	1728	1775	1782	1806	1829	1840
名称							
田丸城・田丸城下	○	○	○	○	○	○	○
蚊野の松原			○	○	○	○	
長者屋敷	○	○	○	○	○	○	
伊勢紀伊国界	○	○	○	○	○	○	○
西行松	○	○	○	○	○	○	○
親知らず子知らず	○		○	○	○	○	
鬼が城	○	○	○	○	○	○	○
あふま権現二王石	○		○	○	○	○	○
南海の眺望			○	○	○	○	

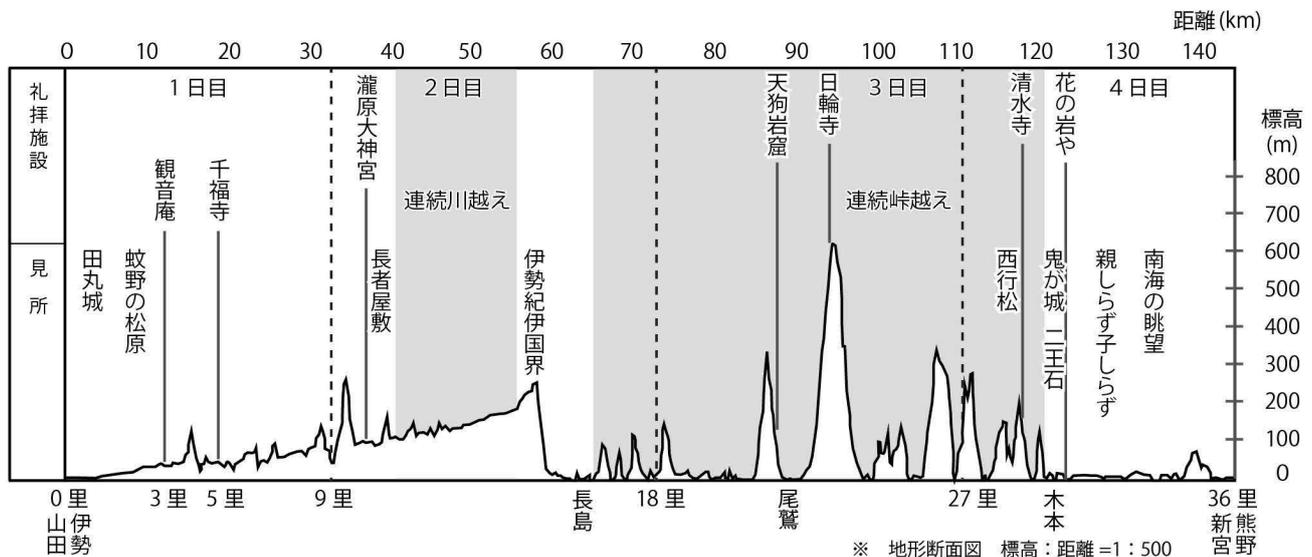


図-2 礼拝施設と見所の立地

では、坂上田村麻呂が征討した鬼の住居であるとされる。現地は、東西 1.2 km にわたって連なる熊野酸性岩の大岩壁と風波食によって形成された岩屋が見られる特異な地形を呈する。つまり鬼が城は自然地形に「鬼」の伝説が付加され、巡礼者におそろしき印象を与える場所として認識されたと考えられる。

「あふま権現二王石」は、現在の三重県熊野市井戸町に所在する、獅子岩と呼ばれる岩塊とその南側にある岩塊のことである。道中案内では「あふま権現の二王石」として記述され、宗教施設を巡礼者に想起させるものであったと考えられる。

「親しらず子しらず」は、現在の三重県熊野市から御浜町にかけて、熊野灘に流入する熊野宮川、井戸川、志原川、市木川、尾呂志川の河口である。道中案内では難所の渡河地点で、親子でもお互いに振り向く余裕がないほど危険な地点であるとして名称起源が語られる。現地を荒天時に踏査すると、波は高く、浜へ出ることも危険であることから、この地点が大きな旅の障害として認識されたと思われる。つまり、「親しらず子しらず」は、旅の困難を示す場所として巡礼者には認識されたと考えられる。

「南海の眺望」は現在の三重県熊野市から御浜町にかけての七里御浜からの海の眺めである。道中案内では海の眺めを絶景として紹介し、狼煙台と中国船の漂着について紹介するものがある。すなわち、太平洋の絶景を異国情緒と関連付けて巡礼者に認識させているものと考えられる。

3) 見所の意味と立地

以上のように見所は、賑わい—暮らし—かつての賑わい—地理的境界—物語—伝説—宗教—苦難—絶景—異国情緒、と展開する演出内容を持っていることが判明した。すなわち、道中案内は、単なる眺めを紹介するのではなく、物語性の強い日本の伝統的な風景観である「意味の風景」²⁰⁾をうみだしていると考えられる。

さらに見所の立地について検討する。ここまで把握した重要な見所 9 箇所を、伊勢山田から熊野新宮までの縦断面図に図示した(図-2、見所)。その結果、見所が集中して立地する箇所とほとんど立地しない箇所があることが判明した。見所の立地する箇所は、伊勢紀伊国界と西行松を除き、地勢が比較的平坦で歩きやすい箇所であり、山間を蛇行する大内山川を連続して 6 回越える連続川越え区間や、間越峠や八鬼山峠などを連続して越える連続峠越え区間など、地勢が険しく歩き難い箇所には見所がほとんどなかった。つまり、これら見所は歩くのが容易で歩行に倦怠する箇所に立地し、立ち止まって休息し気分を刷新させ、全行程における巡礼者自身の位置を示す空間的仕掛けであったと考えられる。同時に連続峠越え区間における峠などは、巡礼者が険しい地形に意識が集中するため、見所としては成立しがたかったものと考えられる。

以上のように、近世において、伊勢山田から熊野新宮までの街道には、歩行が容易で倦怠しがちな区間に巡礼者を立ち止まらせて気分を刷新させ、全行程において巡礼者自身の位置を示す空間的仕掛けが存在し、それらは道中案内によって単なる眺めではない意味の風景を与えられ、日常世界から非日常の世界への旅を演出していたことが明らかとなった。

4. まとめ

本稿は近世の熊野参詣道伊勢路に施された巡礼空間の装置性を明らかにした。礼拝施設については、旅の行程 1 日毎に巡礼者を礼拝施設に参詣させる空間的仕掛けが存在し、それらは道中案内によって巡礼旅と関連付けられていた。見所については、歩行に倦怠しがちな区間に巡礼者に気分を刷新させ、自身の位置を示す空間的仕掛けが存在し、それらは道中案内によって意味の風景を与えられ、日常世界から非日常の世界への旅を演出する意味を与えられていた。礼拝施設と見所は空間的仕掛けと道中案内の情報の組み合わせによって巡礼者の意識に変化を与えていたと考えられ

る。さらに、礼拝施設と見所の 2 つの要素は相互補完的であり、一体となって巡礼路の「装置性」を構成し、伊勢山田から熊野新宮までの全域を「熊野参詣道伊勢路」として巡礼者に認識させていたと考えられる。

本研究は JSPS 科研費 JP16K08125 の助成を受けたものです。

補注及び引用文献

- 1) 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会(2005):世界遺産紀伊山地の霊場と参詣道, 152pp
- 2) 三重県教育委員会(1981):歴史の道調査報告書 I 熊野街道, 121pp
- 3) 塚本 明(2008):熊野街道『伊勢路』の特質—江戸時代の道中記から—第 9 回全国歴史の道会議三重県大会報告書, 6-21
- 4) 田中智彦(1989):西国巡礼の始点と終点神戸大学文学部紀要 16, 39-61
- 5) 田中智彦(2004):聖地を巡る人と道岩田書院
- 6) 浅川泰宏(2008):創出される表象空間—遍路道再生運動の事例から—:哲學 119,35-64
- 7) Ian Reader(2005):Making Pilgrimage—meaning and Practice in Shikoku:University of Hawaii Press
- 8) 森正人(2012):巡礼の近代性:一九〇五年の西国三十三所順礼競争:人文論叢 29, 45-55
- 9) 樋口忠彦 (1977): シークェンス景観:景観論土木工学大系 13, 127-176: 船越徹他 (1983): 参道空間の研究 (その 6, 7):日本建築学会大会学術講演梗概集, 1711-1714
- 10) 下村彰男・江頭俊昭(1992):近世における遊楽空間の装置性に関する考察:道園雑誌 55 (5), 307-312
- 11) 本論で分析に利用した道中案内は以下の 7 点である。文献番号は本文表 1・表 3 の文献番号に対応する。なお、文献 1 以降の文献の執筆者はそれ以前の文献を参照している可能性はあるが、それを明確に指摘することは困難である。文献 1:養流軒一簞子(1690):西国道しるべ国立国会図書館蔵; 文献 2:笠屋五郎兵衛 (1728):巡礼案内記 三重県教育委員会(1981)『歴史の道調査報告書 I 熊野街道』所収; 文献 3:西川氏 (1776):西国順礼細見記『国文東方弘教叢書』第 1 輯 第 7 卷 (紀行部)所収; 文献 4:大阪屋長三郎 (1782):巡礼道中指南車:三重県教育委員会 1981『歴史の道調査報告書 I 熊野街道』所収; 文献 5:左楽斎 (1806):西国巡礼道中細見増補指南車:青樹堂大阪屋長三郎:和歌山県立図書館蔵; 文献 6:沙門某(1829):新増補細見指南車:玉樹堂田辺屋新四郎・青樹堂大阪屋長三郎:国立国会図書館蔵; 文献 7 俣野通尚・池田東籬(1840):天保新増西国順禮道中細見大全:平野屋茂平:齋宮歴史博物館蔵
- 12) 岡田登(1987):第五編宗教 第一章 瀧原宮・瀧原並宮:大宮町史, 639-699
- 13) 曉鐘成(1853):西国三十三所名所図会:臨川書店復刻版, 1041pp
- 14) 田嶋通雅・伊藤裕偉(2009):岩屋堂の石仏群 三重県石造物調査報告 I, 39-40
- 15) 三重県教育委員会(2009):三重県石造物調査報告 I—東紀州地域—, 165pp ただし、石仏は未報告であり現地踏査によって確認した。
- 16) 伊藤裕偉(2009):熊野街道八鬼山道周辺の中世石造物 三重県史研究第 24 号,93-114
- 17) 『日本書紀』巻一第五段一書第五條「一書曰。伊弉册尊生火神時。被灼而神退去矣。故葬於紀伊國熊野之有馬村焉。」を引用し、この地であるとする。
- 18) 3D Landscape Navigator カシミール 3D Ver9.1.6
- 19) 近世の「里」は半刻で歩行できる時間距離であり、これらは地形等を考慮したうえでの距離となっている。そこで、本研究では江戸時代の庶民の旅の 1 日あたりの歩行距離を約 9 里とし、9 里ごとに区切り線を入れた。谷登尋徳(2007):近世後期の庶民の旅にみる歩行の実態—江戸及び江戸近郊地の庶民による伊勢参宮の旅を中心として—:スポーツ史研究第 20 号, 1-22; 石川英輔(2012):一里という距離:ニッポンのサイズ身体でわかる尺貫法, 116-125
- 20) 竹田憲治(2014):熊野参詣道と原大辻観音庵の石造物 (1) ~ (3):伊勢の中世 189 号,3pp, 191 号,3pp, 192 号,4pp
- 21) 伊藤文彦(2014):熊野参詣道伊勢路を歩く (6):伊勢の中世 188 号, 6pp
- 22) 不詳 (1827):西国順礼道芝の記国立国会図書館蔵
- 23) 大野草介(2001):西行と伊勢路熊野道中記 Ⅱ:こしえの旅人たちの記録:みえ熊野学研究会, 151-156
- 24) 西田正憲(1999):瀬戸内海の発見 意味の風景から視覚の風景へ:中公新書, 263pp